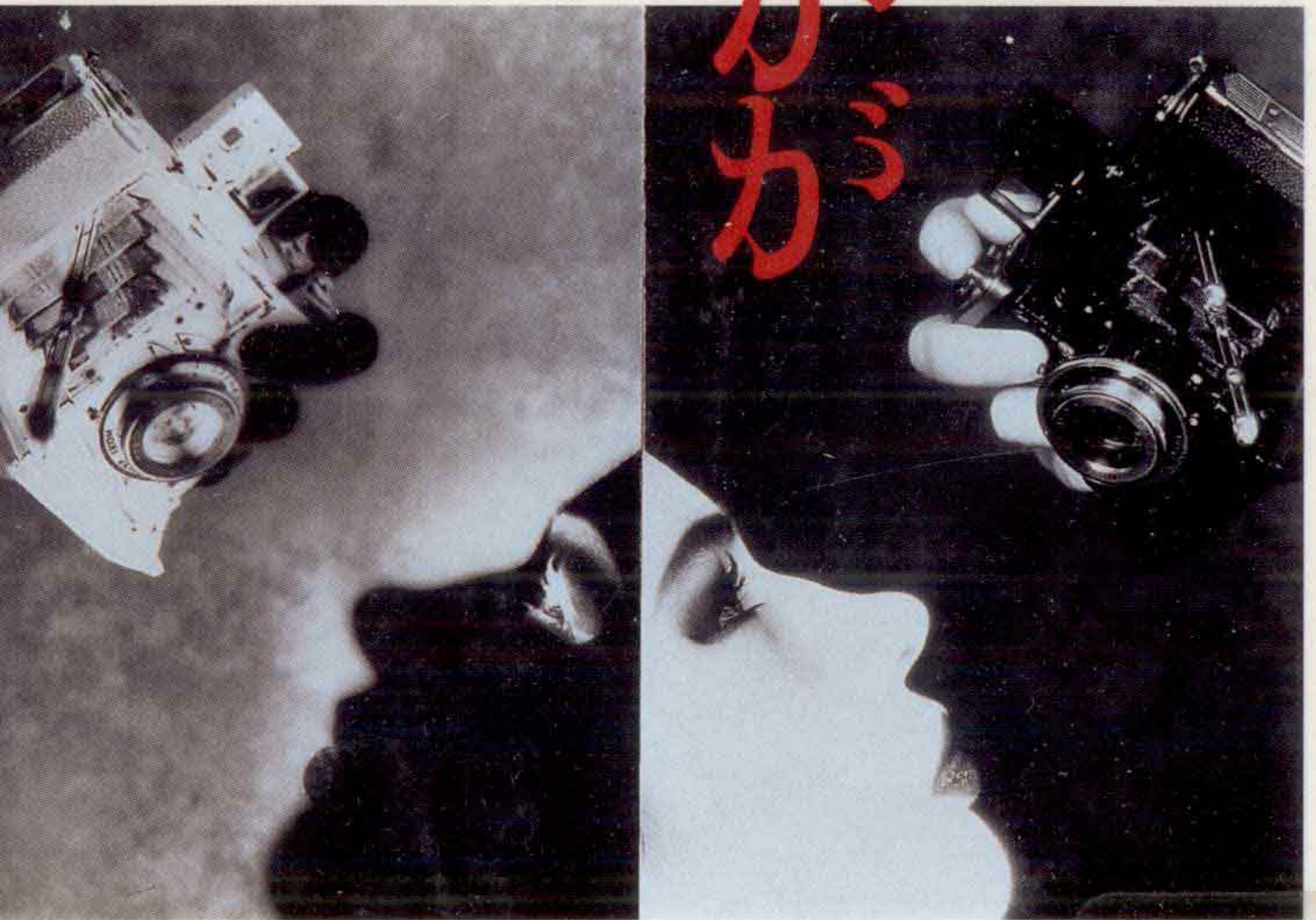


東野圭吾

Keigo Higashino

どちら
彼女を
殺した
か



ど
彼女を
殺した
か

Who done it?

N. D. C. 913 252p 18cm

どちらかが彼女を殺した

一九九六年六月五日 第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者—東野圭吾

ひがしの けいご © KEIGO HIGASHINO 1996 Printed in Japan

発行者—野間佐和子

発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一―二―〇 編集部 〇三―五三九五―三五六

販売部 〇三―五三九五―三六二六

製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷所—豊国印刷株式会社 製本所—株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第三出版部あてにお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

東野圭吾

Keigo Higashino

どちらが
彼女を
殺したか

Who done it?



ど
れ
が
彼女
を
殺
した
か

ISBN4-06-181687-X

C0293 P780E (0)

**どちらかが彼女を殺した
東野圭吾**

定価780円(本体757円)

自殺の偽装を施され最愛の妹を殺害された愛知県警豊橋署に勤務する和泉康正は、“現場検証”の結果、二人の容疑者を割り出す。ひとりは妹の親友。もうひとりはかつての恋人。康正は“復讐”のために懸命に真犯人に肉迫するが、その前に練馬署の加賀刑事が立ちはでかる。二人の警察官の“推理の攻防”の結末やいかに!?

どちらかが彼女を殺した

野圭吾

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーイラストレーション 亀海昌次

目次

第一章	7
第二章	29
第三章	69
第四章	119
第五章	170
第六章	220

第一章

1

二枚目の便箋の、半分あたりまで書いたところで誤字をした。なんとかうまくごまかせないものかと思ひをなぞつてみたが、却つて汚くなつてしまった。和泉園子いづみそのこは顔をしかめて破りとり、くしゃくしゃと丸めて屑籠にほうりこんだ。

書き直す前に、もう一度一枚目を読み直した。その出来映えは、納得するにはほど遠いものだった。彼女は一枚も破り、やはり丸めて投げつけた。今度は屑籠に入らず、壁で一度バウンドしてカーペットの上に落ちた。

彼女はガラステーブルの下に脚を投げ出したまま、身体を倒して左腕を伸ばした。丸めた便箋に手が届いたので、再度屑籠に向かって投げた。ところが今度も外れ、壁際に落ちた。もう放っておくことにした。

身体を起こし、改めて便箋と向かい合つた。しかし手紙を書く気は失せていた。今の気持ちを文字にすることなど、はじめから無理だったのだという気がした。

園子は便箋を閉じ、本棚に戻した。さらに万年筆も、ピアロの形をしたペン立てに入れた。帽子をかぶせると、陶器の人形にしか見えなくなる。

それから彼女は時計を一瞥いちべつし、テーブルの上に置いてあるコードレスホンに手を伸ばした。そして最も馴染みのある番号を押した。

「はい、和泉ですが」兄の無愛想な声が聞こえてきた。

「もしもし、あたし」

「おう、園子か」と彼はいった。「元気にやってるか」

いつもどおりの問いかけだった。園子としてもいつもどおりに、「元気だよ」と答えたかった。しかしそれだけの気力がなかった。

「う……ん、あんまり元気じゃない」

「なんだ、風邪かぜか？」

「ううん、病気はしてない」

「……なんかあったのか」途端に兄の口調に余裕がなくなった。受話器を片手に、背筋をぴんと伸ばした姿が目に見えかぶようだった。

「うん、ちよつとね」

「何があったんだ」

「いろいろと。でも心配しないで、大丈夫だから。」

明日、そっちに行ってもいいかな」

「そりゃあかまわんよ。おまえの家なんだから」

「じゃあ、明日帰れたら帰る。お兄ちゃんの仕事？」

「いや、非番だ。それより一体何があったんだ。とりあえずそれを先に話してくれよ。気になるじゃないか」

「ごめん。変なことしちゃったね。気にしないで。明日になったら、もう少し元気になってると思うよ」

「園子……」

受話器の向こうから、低い唸りうな声が聞こえてきた。兄の苛立ちいらだを思うと、少し申し訳なくなった。

「じつをいうとね」彼女は小声でいった。「裏切られちゃったんだ。信じてた相手に」

「男か？」と兄は訊きいた。

園子はどう答えていいかわからなかった。

「お兄ちゃん以外、誰も信じられなくなっちゃった」

「どういふことなんだ」

「あたしが死んだら」と少し声を大きくしていい、

「きつと一番いいんだらうと思う」と沈んだ声で続けた。

「おい」

「冗談」といって兄に聞こえるように笑い声をあげた。「ごめん。ちょっと悪ノリしちゃった」

兄は黙っていた。「冗談」で済ませられることではないことを感づいているのだろう。

「明日、必ず帰ってこいよ」

「帰れたらね」

「きつとだぞ」

「うん、おやすみなさい」

電話を切った後も、園子はしばらくコードレスホンを見つめていた。兄がかけ直してくるような気がしたからだ。しかし電話は鳴らなかった。兄は園子が思っている以上に、妹のことを信頼してくれているようだった。

でもあたし、そんなに強くないんだよ、と園子は電話に向かって呟いた。強くないからこそ、わざと心配させるような電話をかけたのだ。誰かに、今の辛さをわかってほしかったのだ。

2

和泉園子が佃潤一と出会ったのは、去年の十月だった。場所は、彼女が勤める会社のすぐ近くだ。

園子が勤務しているのは、電子部品メーカーの東京支社だった。高層ビルの十階と十一階を借り切っており、従業員は約三百名。本社は愛知県だが、実質的に社の中枢部は東京支社にあるといっても差し支えなかった。

園子は販売部に籍を置いていた。部員は約五十名だ。そのうち女子は園子を入れて十三名だった。大半は彼女よりも年下である。

昼休み、園子は一人で食事に出た。同期入社仲間たちが全員退職して以来、昼食を誰かと共にすることはめつたになかった。以前はよく後輩たちにも誘われたが、今ではそういうこともなくなった。和泉さんは一人のほうがいいようだ、と彼女たちも察

したらしい。無論そのほうが彼女たちとしても氣を使わずに済むのだろう。

園子が後輩たちと食べたくないのは、食べ物好みがまるで違うからだだった。彼女は和食が好きで、朝でも大抵は御飯だ。ところが数歳年下の後輩たちは、概して洋食を好む。園子も嫌いではないが、毎日となるとうんざりしてしまう。

彼女は蕎麦屋に行くつもりをしていた。会社から歩いて十分ほどのところに、いい店を見つけたのだ。上品なだしを使ったその店のてんぷら蕎麦が彼女のお気に入りだった。愛知県出身の彼女は本来はうどん党だったが、東京で生活するようになってから蕎麦のおいしさもわかるようになっていた。それにまだ開店して日が浅いせいか、その店で知っている人間と顔を合わせたことはない。それもまた彼女がよく利用する理由だった。愛想笑いをしながら食事するのは、苦痛以外の何物でもなかった。

蕎麦屋のある細い通りに入ると、道端で一人の青

年が絵を売っていた。といっても青年は折り畳み式の椅子に腰かけ、雑誌を読んでいるだけだ。十数枚の絵がキャンバスのまま、後ろのビルの壁に立てかけてあった。油絵の範疇はんちゆうに入るものだということは、こういうことに疎うとい園子にもわかった。

青年は園子よりも年下に見えた。二十四、五歳というところだろう。合成皮革の黒いジャンパーを織り、両膝が破れたジーンズを穿はいていた。ジャンパーの下はTシャツだった。顔色はあまりよくない。そしてひと昔前のミュージシャンのように、ひどく瘦やせていた。彼は園子が立ち止まっても、雑誌から顔を上げようとはしなかった。

園子は十数枚の絵を見渡した。彼女の氣をひいたのは真ん中あたりに置いてあった絵だ。それが気に入った理由は他愛ない。彼女の好きな猫の赤ちゃんが描かれていたからだ。上手い絵なのかどうかは全くわからなかった。

しばらく眺めていて青年のほうに目を向けると、

いつの間にか彼も顔を上げて彼女を見ていた。細い顎に無精髭が生えている。物憂い表情ではあったが、その目には純粹さが宿っているように彼女には思えた。この女性客は、もしかしたら自分の絵を気に入ってくれたのかもしれない——そう考え、期待している目だった。

その期待に応えてあげようか、と園子は思った。大したことはしなくていい。たった一言いえばいいのだ、これいくらなの、と。

だが彼女が今まさに唇を開こうとした瞬間、視界に一人の人物が入った。

「やあ、和泉さん」その人物が大きな声を出した。

園子たちの上司である井出係長だった。井出は両手をズボンのポケットに突っ込んだまま近づいてきた。背が低く頭の大きい彼は、そんなふうになると一層小柄に見える。

「何してるの、こんなところで」訊きながら、園子の顔と並んでいる絵とを見比べた。

「そこの蕎麦屋に行こうと思って」と彼女は答えた。

「へえ、君もあの店を知ってたのか。いやじつはい店があると教わってね、僕もこれから行くつもりだったんだ」

「そうだったんですか」愛想笑いをしながら、これでまたお気に入り店の一つ減ったと園子は思った。

井出が歩きだしたので、園子も続かざるを得なくなった。青年を振り返ると、彼はもう雑誌に目を落としていた。彼女のことを冷やかす客の一人と解釈したに違いなかった。それが何となく心残りだった。

「絵に興味があるの？」と井出が訊いてきた。

「いえ、特に興味があるってわけじゃないんです。ちよつといいなと思った絵があったものですから、見ていただけです」

どうして言い訳しているんだろう、と自分で思っ

た。

井出は彼女の答えには、特に何も期待していなかったようだ。一つ頷くと、こんなことをいった。

「しかしああいう連中は、どうするつもりなのかねえ」

「ああいう連中って？」

「あの、絵を売ってた若い男だよ。たぶん美大出身か何かで、昨今の不況で就職にあぶれたくちじやないかと思うんだが、あんなことをしていて大丈夫なのかねえ。将来のことを一体どんなふうに考えているんだって訊きたくなるよ」

「絵を描いて生活していいこうと思ってるんじゃないですか」

園子の答えに井出は苦笑した。

「絵描きで食っていける人間なんてのは、ほんの一握りだよ。いや、一摘みといってもいいな。それがわかってて、ああいうことを続けているのかねえ。頭が悪いんじゃないかと思うよ。まあ、若いくせに

生産的なことをせず、芸術家を目指すなんて奴は、どこか現実逃避した部分があるんだろうと思うかね」

上司の言葉に園子は相槌を打たなかった。芸術のことなんか何もわからないくせに、と心の中で毒づいた。そして、こんな男と一緒に昼食を食べなければならなくなった事態を嘆いた。

蕎麦屋では彼女は鴨南蕎麦を食べた。楽しみにしていた天ぷら蕎麦は、井出に先に注文されてしまったからだ。

井出は鼻水をすすりながら天ぷら蕎麦を食べ、その合間に園子にあれこれと話しかけてきた。話題はもっぱら結婚のことだった。この係長は、二十代後半になってもまだ結婚しない女子社員が課の中にいることを、まるで自分の恥のように思っているらしかった。

「働くのももちろんいいが、子供を育てるというのも、人間にとっては大事なことだからねえ」

天ぷら蕎麦を一杯食べる間に、この台詞せりふを井出は三回繰り返した。園子は愛想笑いをし続けた。蕎麦の味は全くわからなかった。

園子たちの会社は定時が午後五時二十分だ。だが残業があつて、建物を出た時には七時を過ぎていた。彼女はいつものように駅に向かう道を歩きかけたが、ふと思いついたことがあつて途中から脇道にそれた。昼間、蕎麦屋へ行くために通つた道だった。

もう、いないかもしれない——そう思いながら、青年が絵を売っていた場所に行つてみた。彼はまだそこにいた。しかし店じまいらしく、絵を片づけているところだった。

園子はゆっくりと近づいていった。彼は絵を二つの大きなバッグに詰めていた。例の子猫の絵は、もう詰めた後なのか、外には残っていないかった。

気配を感じたらしく、青年が振り向いた。彼は一瞬意外そうに目を見張つたが、そのまま作業を続け

た。

園子は小さく深呼吸すると、思い切つて声をかけた。

「あの子猫の絵、売れちゃつたの？」

青年の手が止まつた。だが彼は何もいわない。再び手を動かし始めた。

無視されたのかな、と園子が思つた時だった。青年が一枚のキャンバスを一方のバッグから取り出してきた。子猫の絵だった。

「俺の絵が売れたことなんて、一度もないんだよね」絵を園子のほうに差し出しながら彼はいった。ぶっきらぼうな、だがどこか照れたような響きのあの口調だった。

園子は改めて絵を眺めた。街灯のせいか、昼間とはまた違った表情をその絵は見せていた。茶色の子猫が、片足を上げて自分の股の間を舐めているところまへが描かれている。ひっくり返らないように、片方の前肢まえあしで身体を支えている姿がなんともいえず愛ら

しい。彼女は思わず唇を緩めていた。

絵から顔を上げると、彼と目が合った。

「これ、いくら？」と彼女は昼間訊きそびれたことを訊いた。

すると彼は少し考えるように黙った後、やはりぶっきらぼうにいった。

「いいよ、あげるよ」

予想外の答えに、園子は目を見開いた。

「どうして？ そんなの悪いわ」

「いいんだ。その絵を見て笑ってくれただろ。それで充分だよ」

園子は青年の顔を見返し、一度絵に視線を落とし、それから、再び彼を見た。

「そ、うなの？」

「俺、それを描きながら考えてたんだ。この絵を見て微笑^{ほほえ}んでくれるような人にプレゼントしたいなって」そういうと彼はバッグの中から白い大きな袋を一つ取り出してきた。「これに入れて持って帰ると

いいよ」

「本当にいいの？」

「うん」

「ありがとう。じゃあ、もらっとく」

青年は笑って頷いた。それからすべての絵を二つのバッグにしまうと、一方を左肩から提げ、もう一方を右手に持って立ち上がった。その間園子はそばに立っていた。ある一言をいうチャンスを窺っていたのだ。

「ねえ」彼女は思いきっていった。「おなかすいてない？」

彼はおどけたしぐさで腹を押さえた。「すごくすいてる」

「じゃあ、これから何か食べに行かない？ 絵のお礼に、あたしが奢^{おご}るから」

「俺の絵なんて、ラーメン代にもならないよ」

「でも、あたしには絵が描けないもん」

「絵は描けないかもしれないけど、もっと使える取^と

り柄があるんだろ。だからこそ、その蕎麦屋で昼ご飯を食べられる」そういって、園子が昼に入った蕎麦屋を指した。

「やだ、見てたの？」

「あの蕎麦屋、結構高いよ。俺も腹が減ったから入ろうと思ったけど、値段を見てやめた」

「じゃあ、お蕎麦を奢ってほしい？」

彼女がいうと、彼は少し考えてからいった。

「スパゲティがいいな」

「オーケー。いい店を知ってるわ」と園子は答えた。後輩たちに付き合って、イタリアンレストランに行っておいてよかったと思った。

ギンガムチェックのクロスがかけられたテーブルを挟み、二人は向き合って座った。

メニューは殆ど園子が決めた。魚介類を使ったオードブルをいくつか頼み、メインディッシュにはすずきの蒸し焼きを選んだ。ワインを飲むかと青年に

訊くと、彼は少し考えてから、「シヤブリ」といった。銘柄をいうとは思わなかったので、園子は少なからず驚いた。

青年は佃潤一と名乗った。井出係長が推測したように、やはり就職してないらしい。しかしその理由は、井出がいった内容とは違っていた。彼は絵を描く時間をたつぷりと取りたいから就職しなかったというのだ。現在は大学の先輩がやっているデザイン事務所を手伝い、生活費を稼いでいるということだった。

「俺の絵が額に入れられて、暖炉のある部屋に飾つてある、なんていう状況を望んでいるわけじゃないんだ。もっと気楽にみんなが俺の絵を好きになつて、俺の絵で遊んでくれたらいいと思う。たとえばTシャツにプリントするとかさ」

「子猫の絵を見て笑つたりとか？」

「そういうこと」潤一はフォークにパスタを巻きつけながら、につこりした。ところが、ふと何かを思